

# 有田塞ノ本遺跡

福岡県前原市大字有田<sup>ありた</sup>字塞<sup>さいのもと</sup>ノ本所在遺跡の調査

前原市文化財調査報告書

第 69 集

2000

前原市教育委員会



# 有田塞ノ本遺跡

福岡県前原市大字有田字塞ノ本所在遺跡の調査

前原市文化財調査報告書

第 69 集

2000

前原市教育委員会



## 序

前原市は近年、福岡都市圏のベッドタウンとしての性格を強めており、人口の増加傾向も加速化しています。また、それに伴い、アパート・マンション等の居住区の整備、県道・市道の拡幅も継続的に行われ、市民にとってより住みよい環境づくりが着々と進められています。

しかしながら、前原市を含む糸島地方は『魏志倭人伝』に記されている伊都国の所在地であり、前原市はその中心地域であったと考えられています。事実、市内には三雲・井原遺跡群を中心とした大規模遺跡があり、その重要性は全国的に認識されているところから、工事の際にやむなく破壊されてしまう遺跡については、事前に発掘調査を行い、その情報を皆さんに還元することとしております。

本書は県道有田一大門線の拡幅工事に伴う発掘調査報告書であります。この報告書が今後の研究資料として、また、文化財保護思想の高揚の一助となれば幸いです。

なお、末筆ではありますが文化財の保護にご理解頂き、発掘調査に御協力頂きました福岡県前原土木事務所には心より感謝申し上げます。

平成12年3月31日

前原市教育委員会  
教育長 坂本勝喜

## 例 言

1. 本書は県道有田・大門線拡幅工事に伴い平成11年度に実施した有田塞ノ本遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図は平尾和久が作成した。
3. 本書に掲載した遺物実測図は平尾が作成した。
4. 本書に掲載した図面の製図は平尾が作成した。
5. 本書に掲載した写真は平尾が撮影した。
6. 本書の編集は平尾が行なった。

## 本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4

## 挿図目次

第1図	有田塞ノ本遺跡と周辺の遺跡群 (1/50,000)	2
第2図	有田塞ノ本遺跡の調査区配置図 (1/1,000)	3
第3図	有田塞ノ本遺跡Ⅰ区遺構配置図 (1/100)	4
第4図	有田塞ノ本遺跡Ⅱ区遺構配置図 (1/100)	5
第5図	有田塞ノ本遺跡Ⅲ区遺構配置図 (1/100)	6
第6図	有田塞ノ本遺跡Ⅳ区遺構配置図 (1/100)	7
第7図	有田塞ノ本遺跡Ⅴ区遺構配置図 (1/100)	7

## 图版目次

图版 1-a	I 区全景	9
图版 1-b	II-a 区全景	9
图版 2-a	II-b 区全景	10
图版 2-b	II-b 区石散き遺構	10
图版 3-a	III 区全景	11
图版 3-b	III 区溝	11



# I. はじめに

## 1. 調査にいたる経過

福岡県前原土木事務所より前原市大字有田324-1番地他における埋蔵文化財発掘の通知がなされたのは平成10年7月31日のことである。県道有田・大門線の拡幅工事を行なうとのことであった。

前原市教育委員会による試掘調査の結果、平成10年度工期分についてはすでに遺構面が削平されているため、慎重に工事を行うことをお願いすることで対応し、平成11年度工期分については表土をはがした時点で遺構面を確認したため発掘調査を行なうこととなった。

発掘調査は平成11年12月10日より開始し、途中年末年始の休みをはさんで平成12年3月15日にプレハブ等の調査機材を撤収し、終了した。

## 2. 調査の組織

有田塞ノ本遺跡発掘調査にかかる平成11年度の調査組織は以下のとおりである。

調査主体 前原市教育委員会

総括 教育長 坂本勝喜

教育部長 有田種之

文化課長 松井 昇

文化財係長 林 覚

調査 文化財係 平尾和久

庶務 文化財係 濱地 克

現場作業 柏田睦子、岡田りつ子、和多治子、藤森啓子、米山八重子、高橋マツ子、  
牧井定代、杉本美知子、原口マツノ、徳永美根子、藤木綾子

遺物整理作業 川上辰子、島影やよい、友池真由美



第1図 有田塞ノ本遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)

- |           |            |          |             |          |
|-----------|------------|----------|-------------|----------|
| 1 有田塞ノ本遺跡 | 2 泊桂木遺跡    | 3 泊大塚古墳  | 4 御道具山古墳    | 5 泊城崎古墳  |
| 6 権現古墳    | 7 後口古墳     | 8 四反田古墳群 | 9 稲葉古墳群     | 10 志登遺跡群 |
| 11 潤神社古墳  | 12 浦志遺跡    | 13 上罫子遺跡 | 14 荻浦遺跡群    | 15 釜塚古墳  |
| 16 神在横島遺跡 | 17 三雲・井原遺跡 | 18 端山古墳  | 19 築山古墳     | 20 平原遺跡  |
| 21 ワレ塚古墳  | 22 銭瓶塚古墳   | 23 狐塚古墳  | 24 一貴山鈍子塚古墳 | 25 真方古墳群 |
| 26 東二塚古墳  | 27 林崎古墳    | 28 石崎遺跡群 |             |          |

## II. 位置と環境

有田塞ノ本遺跡の所在する前原市は東を福岡市、西を佐賀県に境を接し、糸島半島の付根に位置する。遺跡は背振山山系に水源を持つ雷山川と多久川にはさまれた南北に長い低丘陵の中位に位置しており、弥生時代から現代まで続く複合遺跡である。南側には有田1号墳が存在する。1)

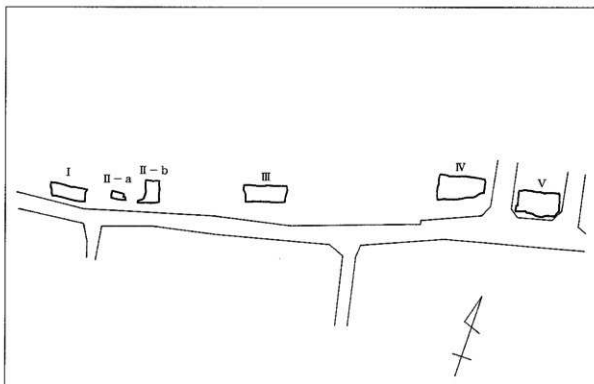
有田1号墳は後円部の北側が大きく削平をうけており、正確な大きさは不明であるが、全長約30mほどを測る古墳であると考えられている。また、後円部墳頂に盗掘坑があり、周りから棺材・石室に使われたと思われる板石が採集されている。

丘陵の東側に雷山川を挟んで位置する曾根丘陵には、平原遺跡がある。継続して行なわれている1号墓の周辺遺跡の調査成果によると、墳墓群は1号墓の周辺にまとまって築かれており、後期前半から墳墓が築かれ始める。2) 周辺部では弥生時代前期末から中期初頭の住居跡が散見された。

曾根丘陵の東側には伊都国の拠点集落である三雲・井原遺跡群が位置している。東を川原川、西を瑞梅寺川にはさまれているこの遺跡群は広範にわたり、三雲南小路遺跡・井原鎌溝遺跡などの王墓の存在も確認されていることから、伊都国の王都と想定される遺跡群である。1970年代から福岡県教育委員会、後に前原市教育委員会により遺跡範囲確認のための調査が行なわれている。3)

注

- 1) 岡部裕俊 編『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第35集 (1991)
- 2) 角浩行 編『平原周辺遺跡』(5) 前原市文化財調査報告書第56集 (1994)
- 3) 柳田康雄 編『三雲遺跡』I 福岡県文化財調査報告書第58集 (1980)  
角浩行 編『三雲・井原遺跡群』I 前原市文化財調査報告書第63集 (1997)



第2図 有田塞ノ本遺跡調査区配置図 (1/1,000)

### Ⅲ. 調査の記録

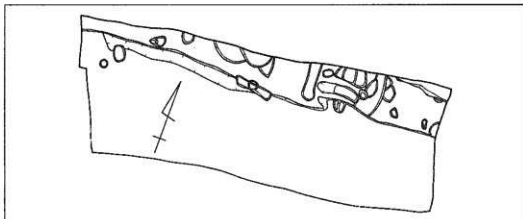
有田塞ノ本遺跡の調査は渠道拡幅部分のみの調査であり、5つの調査区を設け発掘を行なった。  
(第2図)

今回の調査区は以前宅地となっており、全体的に大きく攪乱を受けていた。出土遺物は弥生土器など古い様相を示すものも散見されたが遺構に伴っているものはなく、すべて包含層・遺構面上からの出土となっている。また、はじめは調査区を広く設定していたが、表土下に水道管の掘りなどが見られ、調査面積は狭くならざるを得なかった。

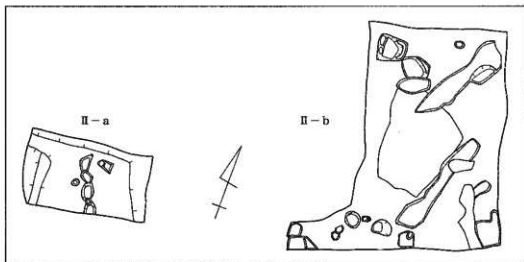
#### I 区の調査 (第3図 図版1-a)

I区は調査区の南側の大半が大きく攪乱を受けており、調査ができていない。かろうじて調査できた範囲は北の端のみで面積は約7㎡となっている。遺構は北側に向かって調査区外に伸びている可能性が高い。確認された遺構は小型のピット数基とやや扁平に広がる土坑が数基のみである。

加えて、深さはほとんどの遺構が深さ10cm内外でその遺残状況も良くない。出土遺物は土器小片のみであった。



第3図 I区全体図 (1/100)



第4図 II区全体図 (1/100)

## II 区の調査 (第4図 図版1-b・2-a)

II 区も調査区の中央部が大きく攪乱されており、東と西に調査区を分けた。東の調査区をII-a 調査区、西の調査区をII-b 調査区と区分しておく。

II-a 調査区は非常に狭く、6㎡ほどの調査面積である。その北と東では攪乱に向かって落ちて いるので、実質的にはより狭い面積の調査となっている。調査区の中央部にピットが4つ連なっ ているがそれぞれ深さが10cmほどしかなく遺残状況も悪い。

II-b 調査区は面積が22㎡ほどある。調査区の南と北に南西—北東方向に掘削された溝が2条 ある。それぞれ浅い溝である。出土遺物はない。その南北の溝に挟まれた形で石敷き遺構がある。 南北3.0m、東西2.0mを測る。石は角の取れた5cmほどのものから、拳大のものまで多様である が、比較的小型のものを集中して用いている。石敷きは厚さ5cmほどで統一している。石の下に は何もなかった。土地の古老の話によると、現在の県道有田・大門線が舗装される前は道路に接し た形で小さな祠があったそうである。現在は調査区の北側に新しい祠が設けられている。おそらく祠の 基礎に用いていたものであろうと考えられる。(図版2-b)

したがって、石敷き遺構を切っている溝は最近のものであろう。II-b 調査区のピット・土坑と もに残りが良いとはいえないが、弥生土器を含むものが1基あった。実測可能な遺物はない。また、 遺構面上より弥生土器片を1個採集した。

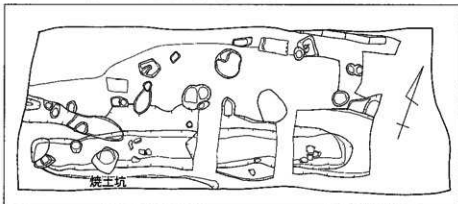
## III 区の調査 (図版3-a)

III 区は比較的攪乱が少ないが東端部などは現代のごみ捨て穴として利用されている。また、調査 区の北側には以前の建物の排水管、礎石等が残っている。調査区の南には東西に長軸を持つ溝があ る。幅1.6m、深さ0.15m～0.50mを測り、溝は西に向かって調査区外に伸びている。溝の中 には石を2箇所に集中的に投げ込んでいるところがある。石はすべて自然石であり、特に加工され ているものはない。また、溝の中央部から東にかけて0.40mほどの落ち込みがある。出土遺物は 自然石以外はない。近世以降の区画溝か。(図版3-b)

溝の西側には、溝を切る形で焼土坑を検出した。平面形が不整円形を呈する。長軸0.72m、短 軸0.70mを測る。中央部に炭が集中しており、それを赤褐色の焼土が4cmほどの厚さで覆ってい る。

熱の及んでいないところは黄褐色を呈している。

III 区では、ピット・土坑ともに比較的良好な遺存状況であったが出土遺物はない。



第5図 III区全体図 (1/100)

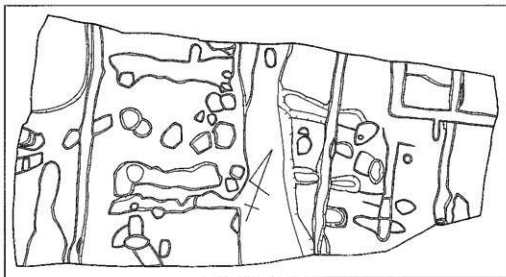
#### IV区の調査

IV区は調査区全面に耕作溝が縦横に走っており、遺構はその間に残っている状況である。調査区の中央部に南北に伸びている溝がある。南北ともに調査区外に伸びている。最大幅1.6m、深さ0.15mを測る。出土遺物がないたため溝の正確な時期を確認することができないが、当調査区での出土遺物で近世以前のものが出ていないので、比較的新しいものであったと思われる。

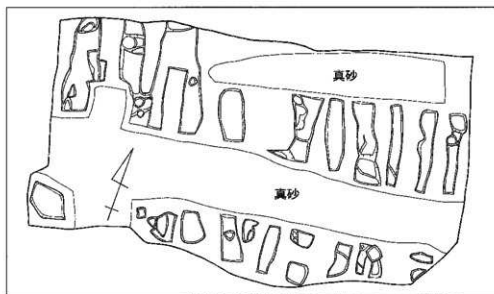
ビット・土坑等の遺構は残りが悪い。また、出土遺物もほとんどないため時期もわからない。

#### V区の調査

V区は調査区の北と中央部に水道管を入れた掘方が東西に伸びており、実質調査できた面積は調査区の約半分となった。残っている遺構も畑の畝と思われるもので、調査区全体で9本確認される。それぞれ南北に長軸を持ち、深さも0.10～0.20mほどのものである。出土遺物もほとんどない。地元の古老の話によると以前、桃畑があったそうである。そのため、古い遺構は壊されているものと考えられる。



第6図 IV区全体図 (1/100)

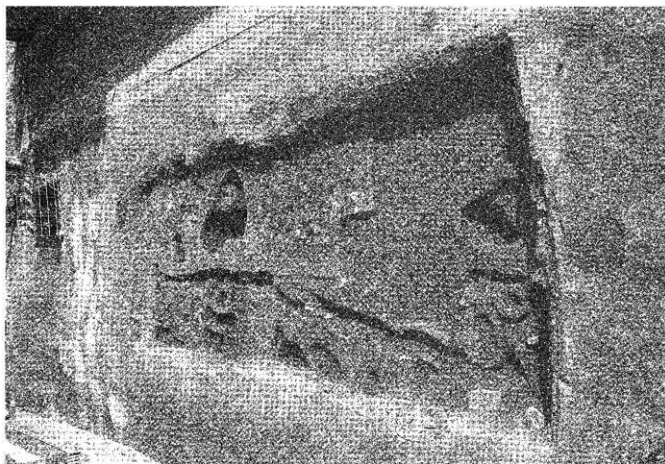


第7図 V区全体図 (1/100)

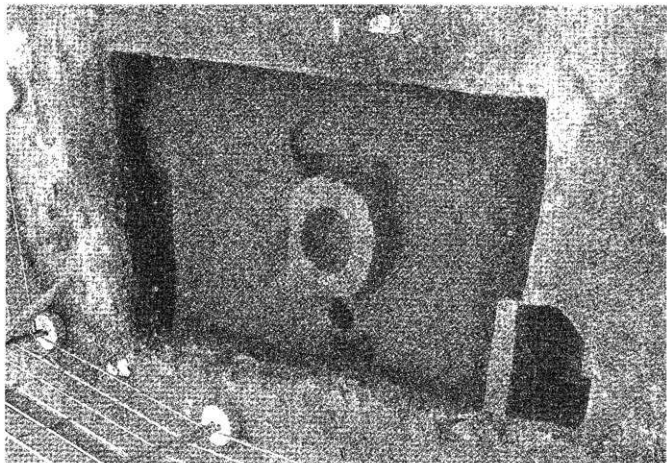
# 版 图





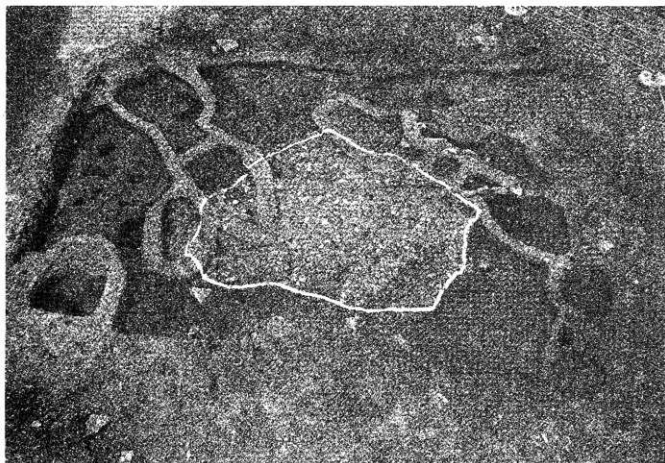


1-a I区全景

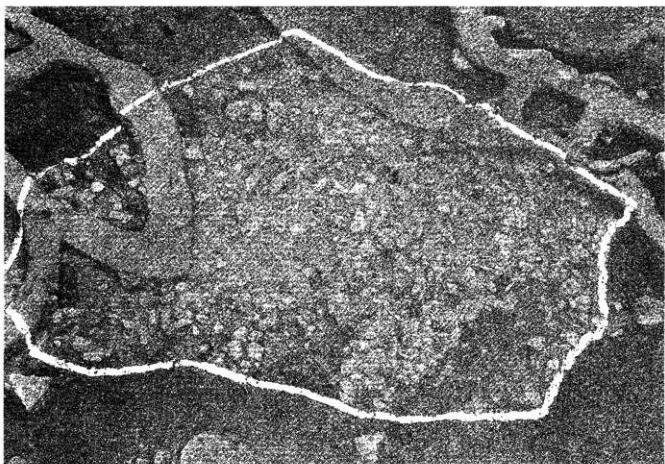


1-b II-a区全景



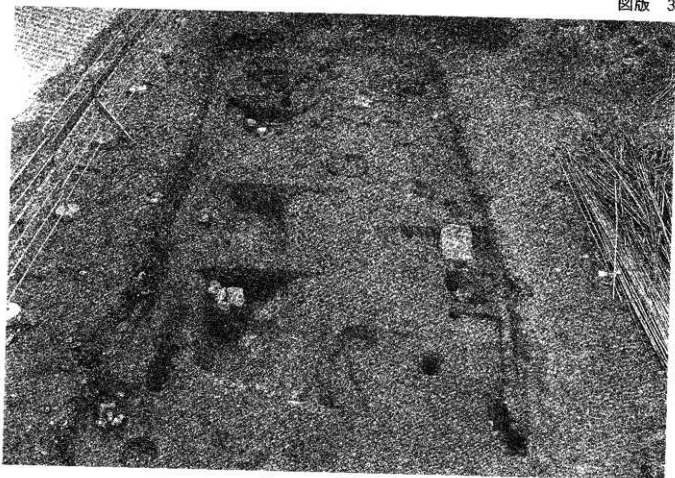


2-a II-b区全景

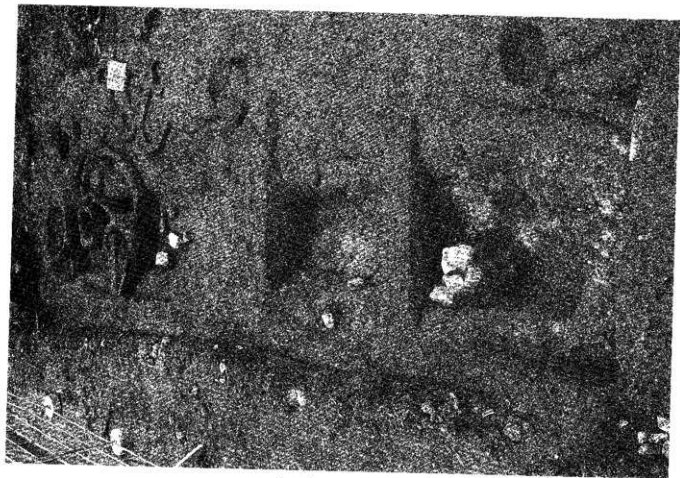


2-b II-b石敷き遺構





3-a Ⅲ区全景



3-b Ⅲ区溝

## 報告書抄録

ふりがな	ありたさいのもと							
書名	有田塞ノ本遺跡							
副書名	福岡県前原市大字有田字塞ノ本所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第69集							
編集者名	平尾和久							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒819-1192 福岡県前原市大字前原623番地							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ありたさいのもと 有田塞ノ本 遺跡	ふくおかけん 福岡県 まゐらぶし 前原市 おほあざありた 大字有田 ありたさいのもと 字塞ノ本			33° 32′ 27″	130° 13′ 19″	1999.12.10 ) 2000.03.31	500㎡	県道拡幅 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
ありたさいのもと 有田塞ノ本 遺跡	集落	弥生～近世		溝 土坑 ビット		弥生～近世土器片		

# 有田塞ノ本遺跡

前原市文化財報告書

第69集

平成12年3月31日

発行 前原市教育委員会  
福岡県前原市大字前原623番地

印刷 前原相互印刷株式会社  
福岡県前原市大字浦志294-5  
電話 092-322-3445